

〔翻 訳〕

P.B.シェリー

『シャーロット王女の死に関する国民への声明』

小 林 龍 一

ここに訳出したのは、P.B.シェリーが1817年、「マーロウの隠者」(the Hermit of Marlow) という筆名のもとに書いたパンフレット『シャーロット王女の死に関する国民への声明』(*An Address to the People on the Death of Princess Charlotte*) である。¹⁾ テキストとしては Roger Ingpen and Walter E. Peck, eds. *The Complete Works of Percy*

1) シャーロット王女：1817年11月6日、出産の際に死亡。のちのジョージ四世（当時はジョージ三世の摂政）とカロラインとの間に生まれた。なお、ジョージ四世とカロラインの離婚問題に関しては拙稿参照（『暴君スウェルフット——破滅へのシナリオ——シェリー研究(15)——』『大阪経大論集』第48巻第1号、1997年5月）。

Cf. ジョージ三世（1738.6.4—1820.1.29、在位1760/1820）ジョージ二世の孫。はやく父フレデリク・ルイを失い、母およびビュート伯に養育され、ボリングブルックの著《愛国王 Patriot King》によって君主としての理想を形成し、即位（1760）するやその理想を実現しようとした。前2代と異ってイギリスに生れた彼は前代に失われた王権の回復を志し、王室費を節約した金で議員を買収して〈王の友 King's Friends〉と称せられる一団を議会内に形成し、数十年にわたって政権を独占したホイッグ党を追い、ビュート、(F.) ノース等のトーリー党内閣を通じて自ら国政を指導した。しかしアメリカ植民地に対する政策を誤ってその独立（76）を招き、国民の不信を買った。しばしば非立憲的な行動に出たが、その後トーリー党のピット（小）を信頼してこれに国政をゆだね（83—1801；04—06）、彼をもって首相の地位が確立した。たびたび精神に異常を来たし（1765；88—89）、晩年全く廃人となり（1811来）、長子（のちのジョージ四世）が摂政となった。しばしば暗殺の危険に会ったが（1786；1800）、国民は王の正直と勇気と私生活の清浄を愛した。

ジョージ四世（1762.8.12—1830.6.26、在位1820/30）ジョージ三世の長男。厳格な教育を受けたが放縦な生活に陥り、しばしば巨額の負債を議会に支払わせた。カトリックの一人 (Mrs. Fitzherbert) とひそかに結婚し（1785）、大婚法（72）により無効とされたが交渉を継続（1811迄）。父の選んだ (A. E.) カロラインと結婚したが（1795）、間もなく別居した（96）。父に反抗して (Ch. J.) フォックスその他のホイッグ党員と親しくしたが、父の発狂（彼の行状もその原因になった）により摂政となって（88—89；1811—20）後は、トーリー党に好意をもち、あらゆる改革に反対した。即位後カロラインを離婚しようとして物議をかもし、(G.) カニングを却けようとして果さず、カトリック解放にも同意せざるを得ず（29）、王の権威は大いに失墜した。（以上、『岩波 西洋人名辞典』）

Bysshe Shelley, Vol. VI (pp. 69–82) を用いた。なお、巻末に同書の解説も翻訳して添えておいた。

*

*

*

われわれは鳥の羽毛を哀れんでいるが、死に瀕した鳥のことを忘れている。²⁾

「シャーロット王女の死に関する国民への声明」

マーロウの隠者 著

I. シャーロット王女が死んだ。彼女はもはや動かず、考えることも感じることもない。彼女は、彼女が今まさに戻ろうとしている土と同様、生命が無い。ほんの数日前には元気いっぱい希望に満ちていた彼女が、いまや腐った死骸であるということを知ることは恐ろしいことである。若くて無垢で美しい女性が、家庭的な安らぎに満ちた心温まる場所から奪い去られ、だれも死んだり去ることなどあってはならない、かけがえのない場所を離れたのである。

II. シャーロット王女の死は、かくも庶民の死と変わらぬ出来事なのである。いったい何人の女性がお産の床で死に、深刻な喪失の記憶に打ちひしがれた、母の無い子供の親族や、ともに生きていくはずであった夫のもとを去ることか。いったい何人の活発で元気な力を備えた女性が死んだことか。彼女たちは穏やかで優しく賢明で、その生活は幸せと和合の連続のようであり、それが壊れたら駄目になるほかない人々のもとを去り、言語に絶する苦しみ^{さい}に身を苛なまれてきたのだ。なかには極貧や恥辱のうちに死んだ者もいたが、その孤児は他人の嘲りと無視の犠牲になりつつ生き延びてきた。夫は枕元で死に瀕した妻を見守り、忌わしい臨終の喉鳴りが聞こえたとき、無神経な看護婦の膝で眠っている赤いほっぺの子がそばにいるにもかかわらず、錯乱した。取り乱した夫は医者^{さい}の顔を凝視し、その表情からすべてを察すると、明らかな絶望が彼の心に深く沈み込んだ。これまでそのようであったし、今でもそうなのだ。諸君は浮き浮きした気分^{さい}でこの大きな町の通りを歩き、そのような光景が至るところで起きているとは思わないのである。また、お産の床で死ぬ母親の数^{さい}を考えたりもしない。

2) トマス・ペイン『人間の権利』。(巻末の解説参照)

そこは最もひどい廃墟なのだ。病気・老齢・戦いにおいては、死は当然のようにやって来る。しかし、生のあとに生が続くはずの喜びと希望に満ち、肩を寄せ合う家族が新たな最愛の生命をもう一つ望んでいるまさにその時、家族のそれぞれを本当にいとおしく思っている妻であり母でもある彼女が死ぬとは！ だが、多数の極貧の女性たちがこのような目に会い、その惨めさは、ここで述べることができないようなことによってさらに増幅されるのである。彼女たちには愛情がないというのか？ 彼女たちの心臓は鼓動しないというのか？ 彼女たちの目に涙があふれることはないというのか？ 彼女たちは血の通った人間ではないというのか？ だが、だれも彼女たちのために涙を流したりはしないのだ。彼女たちを悼む人もいない。棺桶が（教会が実際に棺桶を用意してくれた場合の話だが）墓場に運ばれるとき、道路ぎわに身を寄せて彼女たちがあとに残した悲しみについて道徳を説く者もないのである。

Ⅲ. アテネ人が、共和国を武勇と思慮で導いたり英知でもってそういうことを示した人々の死に対して、社会全体で喪に服し悼んだのももつともである。人間が死者を悼むのは当然である。それは、われわれが我が身以外のものを愛していることの証拠である。そして、友人が死んで塵芥になったのを見て平然と「往きて帰らぬ」³⁾ 旅にさっさと送り出すことができるのは、よほど非情な心の持ち主にちがいない。国家に貢献した者を悼むことは、われわれの最高の愛情を醸成するのにいっそう適した敬愛のこもった慣習である。ミルトンが死んだとき、イギリスの全国民が厳粛な黒い衣服を身に付け、陰鬱な鐘の音が町から町へ鳴り響いていったことは、良かった。フランスの国民はルソーやヴォルテールが死んだとき、社会全体の服喪を申し渡すべきであった。われわれは、われわれにとって特に親密な人々の範囲外で死んだすべての人に対し、本当に深く悲しむことができるというわけではない。だが、われわれが寛容な精神を持ち合わせていれば、社会全体の愛と賞賛と感謝を獲得した者の死に関しても、多少の例外はある。人が、自国や世界に降りかかったどんな社会的不幸をも、たとえそれが死ではないとしても、悼むこともまた当然であろう。このことは一人の人間と他人とのそのような関係を維持する助けになり、すべての人間を全体として考える助けにもなる。そして、それは社会生活の絆なのである。すべての善人を心の中で悲しませる以下のような出来事が起きたときには、社会全体が喪に服すべきである——外国あるいは国内の暴君による「支配」、無実の人を殺すための古ぼけた時代遅れの法律の「誤用」、大衆の幸福について不屈の情熱を抱いている、国民の精華ともいうべ

3) “that bourne whence no traveller returns” Cf. from whose bourn no traveller returns (Shakespeare, *Hamlet*, III, i)

きすべての人々に対する確立された「危険」。だから、もしホーン・トゥクやハーディ⁴⁾が大逆罪で有罪となっていたら、すべての人の心を満たしたであろう悲しみと憤りだけでなく、嘆きを表わす行動もあったであろうことは当然であろう。フランス共和国が消滅したとき、世界は悼むべきであったのだ。

IV. しかし、人々の感情に対するこのような訴えは、軽々しくなされるべきではなく、また、それに相応^{ふさわ}しくない者に関しては、社会全体の服喪がきっかけになってあふれ出る同情という豊かな流れを無駄にするようなやり方でなされるべきでもない。このたびの葬儀は、広範かつ明瞭な不幸であることを示し、祖国と人類を思いやる人々によってもそのように感じられるような不幸であることを表わすためにのみ役立てられるべきである。その性格は特殊なものではなく普遍的なものであるべきなのだ。

V. シャーロット王女の死のニュースと、ブランドレス、ラDRAM、ターナー処刑のニュースは、ほとんど同時に届いた。もし、美しさ・若さ・無垢・感じの良い態度・家庭的な善行が永遠に失われたとき、そういったものだけで社会全体が悲しむのも当然だとするのであれば、この興味深い貴婦人はその評価に十分に値するだろう。彼女は一族のうちで最後の最高の人であった。しかし、個人的な優秀性において彼女と同様に優れながら若い命と希望を奪われた人は他にも多数いたのだ。出産の際の事故が彼女の人生をより高潔にしたわけではなく、その死を嘆きに値するものにしたわけでもない。彼女は大衆にとって毒にも薬にもならなかった——彼女の教養が大きな包括的な意味で彼女を無能にしていたのだ。彼女は王女に生まれた——そして、国民を統治する運命にある者たちは、自らを治めるのに必要な英知や経験さえも身につけずに済ませているのだ。彼女はレディ・ジェイン・グレイ⁵⁾やエリザベス女王のような

4) John Horne Tooke (1736. 6. 25 - 1812. 3. 18) イギリスの政治家、言語学者。初め聖職についたが (1760)、急進的政治思想を抱いて (J.) ウィルクスを支持した (65-68)。アメリカ独立運動援助の廉で入獄し (77-78)、獄中で英語の語源に関する論文《Hepea pteroenta, or the diversions of Purley, 1786》を構想し、ゴート語および古代英語の研究が言語学に必要なことを主張した。元来は〈Horne〉を姓としたが、のち〈Tooke〉の姓をとった (82)。フランス革命に同情して逮捕され (94)、のち下院議員に当選したが除籍された (1801)。

Thomas Hardy (1752. 3. 3 - 1832. 10. 11) イギリス (スコットランド) の急進派政治家。靴工としてロンドンに出て (1774)、靴屋を開業したが (91)、政治に関心をもち、友人と共に、議会および社会改革を促進する組織体〈ロンドン通信協会〉を創立し (92)、トゥク等と共に反逆罪を以て告発されたが釈放された (94)。機関紙〈Moral and Political Magazine〉主筆 (96)。のち政府に弾圧され、革命運動から身を引いた (99来)。(以上、『岩波 西洋人名辞典』)

5) Lady Jane Grey (1537-54. 2. 12.) 9日間のイングランド女王。ヘンリ七世の曾孫。美貌と学

深く広範な学識の持ち主ではなかった。彼女は何事も成し遂げなかったし、何かを熱望するということもなかった。また、彼女が支配すべく運命づけられた人々の幸福を含む一連の大きな政治問題に関しても何も理解することができなかった。だが、このようなことは非難ではなく同情を込めて言われるべきである——死者を^{けな}貶すことはやめよう。王族の不幸とはそういったものであり、無能とはそういうことなのだ——王というものは生まれたときから、すべての報いのうちで良き分別・社会の賞賛・哀悼の気持ちに次ぐ最高のものに値する、いかなるものになることも阻まれているのである。

VI. ブランドレス、ラDRAM、ターナーの処刑はシャーロット王女の死とはまったく異なる性格の出来事である。この三人は忌わしい死と絶え間のない地獄の責め苦への恐怖に公然とさらされつつ、何カ月間も劣悪な牢に閉じ込められていた。そして、最後に絞首台に連れて行かれ吊るされたのである。彼らも家庭を愛し、個人的善行の実践が顕著であった。おそらく、彼らが低い身分であったがゆえに、上の階級の人々の程度以上に、そういった愛情が醸成されることが可能だったのだろう。彼らには息子・兄弟姉妹・父がいたが、みんな彼らを愛していたように思える——シャーロット王女が、その身分に関する法令に縛られて彼女と永久に離れることができないでいた人々によって愛された以上に。彼女にとって夫は父であり母であり兄弟のようであった。ラDRAMとターナーは熟年であった。その愛情は彼らの心の中で熟成・強化されていた。これらの受難者の気持ちが語られることはないだろう。しかし、長く複雑であったにちがいない親族の苦痛は、ターナーの弟エドワードの様子から推測できるかもしれない。彼は兄が^{とうまるかご}唐丸籠に入れられて引き回されるのを見るや、恐ろしい叫び声をあげ失神してその場に倒れ、二人の刑吏によって死骸のように運び去られた。彼らにとって愛しくてたまらない首が胴から切り離されたことを群衆から上がる嵐のような恐怖の音が告げた日に部屋に閉じこもっていた彼らの苦痛はどれほど大きかったにちがいないことか！ そうなのだ——彼らは群衆の間から沸き起こる猛烈な叫び声に耳を傾けていたのだ。彼らは、恐怖におびえた1万人の人々が殺到する足音と、ズタズタにされ表情の歪んだ首がそのとき空中高く掲げられたことを知らしめる呻き声と喚き

才をもって知られ、年少にしてギリシア、ラテン、ヘブライ、イタリア、フランス語に通じ、当代の学者を讃嘆させた。権臣ノーサンバランド公は自家に王統を伝えようとして、息子(Guildford Dudley †1554)と結婚させ(1553)、エドワード六世をして彼女に王位を継承すべきことを遺言させた。王の死後女王たることを宣せられたが(同.7)、国民はメアリー一世を推戴して反対し、在位9日にして捕えられ、のち夫と共に処刑された。(『岩波 西洋人名辞典』)

声を聞いた。受難者たちが死んだのである。死とは何か？ 死のあとにやって来るものを誰が言えようか？⁶⁾ ブランドレスは冷静で、われわれの見込み違いの結果がそのような激しい弾圧を招いたのだと信じていたことは明らかである。ラDRAMとターナーは、神によって永遠の劫火に投げ込まれるのではないかと恐れおののいていた。聖職者のピカリング氏が、ブランドレスがまちがった確信によって将来の「統治者」と和解する唯一の機会を失うことがないことを願っていたのは明らかである。死とはどんなものであるかをだれも知らなかったし、知ることもできなかった。だがこれらの人々は、犠牲者の現在および将来の苦しみについても知らず、また、それを考えもしない第三者によって無限の深淵に無造作に突き落とされたのである。いかなる原因にもせよ、人間が人間の命を奪うことほど恐ろしいことはない。他のどんな不幸にも救いや慰めがあるものだ。それを切り抜ける「力」が生命を維持することをやめると、悲しみと苦しみと担われなければならない精神的な負担が生じる——そのような悲哀が精神を向上させるのだ。しかし、人間が人間の血を流すと、復讐・憎しみ・延々と続く処刑・暗殺・追放が果てしなく続くのである。

Ⅶ. 以上がこれら三人の死に対する個人的な、またその一部は世間一般の考えである。しかし、いかに悲しかろうと、それが単なる私的なありきたりの悲しみであるなら、社会は全体として嘆くべきではない。しかし、これはそんなものではないのだ。これら不運な人たちの死につながった事件は、社会全体の不幸なのである。私は三人に大逆罪を犯したと宣告した陪審員たちを非難しない。おそらく彼らの犯罪をそのような呼称にすることを法が要求しているのであろう。暴力の解決策は暴力に求めることができると考えている、そういった無思慮な連中には多少の自制が^{そそのか}ぜひとも強いられるべきであろう——たとえ抑圧者たちが彼らに今回の三人を殺すよう唆したのだとしても。彼らは悪の道具なのであり、それを使う手ほど罪深くはないが、警戒心を呼び起こさせるには十分だ。しかし、絞首と斬首による三人の死と、その死が特異で重大であるという事情が、イギリス国民が癒しがたい悲しみを以て悼むべき不幸を構成しているのである。

Ⅷ. 王や大臣というものはいつの時代においても浪費と流血を渴望する点において、

6) 【シェリーによる注】“Your death has eyes in his head—mine is not painted so.” (Shakespeare, *Cymbeline*, V, iv) Cf. 「じゃあおまえの死神には目ン玉がついてるってわけだ、ふつうやつの骸骨には目ン玉がついてないように描かれてるが。」(小田島雄志訳, 白水社: 白水Uブックス 34)

だれにも引けを取らなかった。この国では、アメリカで独立戦争が起きるまで、この嘆かわしい傾向に対し、実に弱く緩やかではあるが抑制力が機能していた。アメリカが独立を宣言するまで、イギリスはたぶん地球上に存在する最も自由で輝かしい国であった。国家のあるべき姿としては十分に望ましいというものではなかったが、そこに国家が介入しなければ如何なるものにもなり得るのだ。しかしながら、その根本的な欠陥の結果はすぐに明らかになった。われわれの代表によるいびつな構成の議会が少数の貴族の手に握られた政府は、ウィリアム三世⁷⁾の大臣たちによってデッチあげられた、公債による歳入を当てにする方策を推し進め、あげくの果てに莫大な負債を発生させた。フランスに対する戦争において、この政策は現在に至るまで継続され、公債の「利息」だけで、国家予算のうち常備軍・王室・儀仗の衛士・役人を維持するために惜しげもなく浪費されている分の二倍以上に達している。この負債の結果、社会的なまとまりと文化的な生活の基盤を奪うといったような、生活費の非常に不平等な配分を産むことになる。それは、これまででも十分に重い負担になっていた貴族のほかにも新たな貴族階級を産み出し、以前の二倍の人々に勤勉で貧しい人々が生産した物で贅沢かつ怠惰な生活をする権利を与えているのである。そして、彼らにそのような権利が与えられているのは、彼らが他の者より賢明で賞賛に値するから、というわけではなく、彼らの余暇が社会全体の利益のための計画や、その創造物が国を高貴かつ魅力的にする知性や想像力の行使に費やされているから、というわけでもない。彼らは「恐れもなく、汚れもない」誇りと名誉を備えた昔の貴族ではなく、公債に投機をしたり政府におべっかを使ったり卑劣な取引をしたりして、公の債権者という称号の

7) (1650.11.4 - 1702.3.8, 在位1689/1702) オレンジ公 (Prince of Orange), オランダ統領 (1672/1702)。オレンジ公, オランダ統領ヴィレム二世 (Willem II 在位1647/50) とイギリス王チャールズ一世の長女メアリ (Mary) の子として父の死の約1週間後にヘーグに生れ、その少年時代を共和党の首領ヴィット等の反対派の監視の下に送り、寡黙冷厳な性格を形成した。極めて早熟で、ルイ十四世のオランダ侵略が始まるや、国民の期待を担って統領兼陸海軍総司令官に推戴され (1672)、フランス軍の侵入に頑強に抵抗しオーストリア、スペイン、スエーデン、ドイツ諸国と同盟し (86)、ルイ十四世の野心を挫くことを畢生の業とした。ヨーク公 (のちのイギリス王ジェームズ二世) の長女メアリ (のちのメアリ二世) と結婚 (77)、のちジェームズ二世が対仏同盟に参加する意志なきを知るや、その反対派を支持し (87)、彼の圧制に悩むイギリスの指導的政治家の招請を受け (88.6)、約1万2千の兵を率いてイングランド西部に上陸 (88)、ジェームズをフランスに逃亡させ、議会の提出した〈権利宣言〉を承認して妻メアリと共にイギリス王位に即いた (89)。外国人としてイギリス国民に好かれず、またジェームズ派はしばしば彼の暗殺を企てたが、彼は議会を尊重し、その治世に議会政治と政党内閣の基礎ができた。しかし彼の関心は主として外交にあり、イギリスを対仏同盟に引入れ、しばしば大陸に出征、スペイン継承戦争 (1701-14) 勃発に当り、対仏〈大同盟〉を形成 (01)、その盟主としてルイ十四世に対抗したが、落馬が因でロンドンに歿。(『岩波 西洋人名辞典』)

権利を得たつまらないくだらない奴隷根性の持ち主なのだ。彼らは「洗練された社会から成るコリントの首都」などではなく、建築物の豪華な狭間飾りを台なしにするつまらない蕩なのだ。この制度の結果、日雇い労働者はいま1日16時間働いても以前に8時間働いて得た賃金しか得られないのである。それを最も簡単かつ分かりやすい形で説明しよう。土地を耕し布を織る労働者とは、妻や子のために持ち帰る賃金の中から、年額4,400万ポンドの支払い義務がイギリス国民に課せられている年金の受領権が主たる要求である人々の楽しみと慰めに備えなければならない人々のことである。以前、国民は軍隊・儀仗の衛士・王室・地主を養った。これは国民が甘受するのが望ましいことではあったが、苛酷な強制である。圧制の結果として生じる弊害は多種多様だが、これが、すべてのうちで典型的なものである。すなわち、人間がある階級に属する者のために働かざるを得ないということは、人間の間が存在する「差別」を存続させるのに不必要であるだけでなく、過度の不正によって社会の秩序にとって重要なすべてのものの基盤そのものを危うくし自由の敵であると同時に失政の子であり非難者でもある「社会的混乱」を招く、ということだ。国民は、二つの溝の縁でよめきつつ、そのような危険と退廃の連続と、その結果である不幸にうんざりし始めた。民衆は大声で、国民の自由な選挙制度を要求した。人間が作ったどんな政体も差し迫る困難に対応することができないということが感じられ始めたのである。国家の必要経費を永久に超え続ける、年額4,400万ポンドの支払いに対する解決策の有無に関する問題に対処することができるのは国民以外にない。気高い精神の持ち主もすでに黄泉の国へ旅立ち、自由を愛する気持ちと愛国心とそういった輝かしい感情に付き従う自尊心が人々の胸のうちに蘇った。政府の方策は破綻したのである。

IX. イギリスの工場地帯には長年にわたって政府への不平と不満が広がっていた。これは先に述べた原因によって作り出された二重の貴族制度の結果である。贅沢の犠牲者である製造業者はこの制度によって、愛情も健康もなく、貧困の不安と危険によって産み出される動揺と浪費の社会状況を無効にするような知識を身につける暇も機会もなく、飢えたまま放置されている。ここに、どんな目的であろうと数人の無知な人間を不法な行為へ駆り立てたいという策謀家にとって願ってもない場があった。国民の自由な選挙制度の要求は、もしなんらかの威嚇と不利益が用意されなければ、認められざるを得ないということが明らかになると直ちに、最も恐ろしい残虐行為の陰謀がつぎつぎに準備された。どの程度までの政府高官が極悪非道なスパイの犯罪行為に関わっているかを知ることは不可能である。彼らがどれほどの人数で、どの程度の活動をしてきたのか、また、どんな偽りの希望を掲げて無教育な民衆を煽り、いまだに

断頭台や絞首台に送っているのかを知ることは不可能である。しかし、すべての民衆が議会制度改革を求める声を上げるや、直ちにスパイが放たれたということだけは明らかである。こういった連中は、人間のうちで最も価値のない恥ずべき者の中から選ばれ、多くの飢えた無学な労働者の間にばらまかれた。不満がなければそれをデッチあげることが彼らの仕事であった。正当であろうと不当であろうと、とにかく生贄^{いけにえ}を見つけることが彼らの仕事であった。民衆が自由を獲得しようとするいかなる試みも、われわれが苦しみ喘いでいる借金と税金の重荷を軽くしようとするいかなる試みも、もし成功するようなことがあれば、餓死寸前の民衆は一斉に蜂起し、すべての秩序・階級・慣習・法を混乱させ社会全体を崩壊させるであろうという印象を一般の人々に植え付けることが彼らの仕事であった。彼らが手先どもの頭に叩き込むよう命じられた結論は、独裁的な権力が永続すべきであるということであった。有効なこの印象を作り出すために、彼らはなんの罪もなく疑うことも知らない何人かの田舎者を騙して悪事を行なわせたが、彼らが受けた罰は無残な死である。飢えた無知な数人の製造業者はこういった無慈悲で血に飢えた陰謀家による甘い約束に惑わされて、国家に対する反逆と呼ばれるものに結集した。すべての準備が整った。そして待機していた18人の騎兵が、驚く犠牲者たちを牢に導いたことは確かである。あとは死刑執行人の手によってズタズタに切られるだけであった。いまや彼らの死を招いた残酷な扇動者たちは引退し、悪行の人生によって得た大金を手にして楽しんでいる。民衆の声は臆病で利己的な人々によって圧殺された。彼らは恐怖という重りを世論という秤^{はかり}に載せたのだ。そして、議会は行政府に対し新たに特別な権限を与えた。それは、決して放棄されないかもしれないし、流血によって放棄されるかもしれないし、国民の集会をしょっちゅう行なうことによって彼らの手からもぎ取らなければならない権限だ。われわれが選ぶべきものは、専制政治か革命か改革である。

X. 11月7日、ブランドレス、ターナー、ラDRAMは処刑台に上った。われわれはブランドレスには他の二人ほど同情しない。というのも、彼は人を殺したようだからである。しかし、だれが殺人に至る行為を唆したのかを銘記すべきである。ブランドレスは、死を前にしたその男が「オリバーが俺をこんな目に合わせやがったのだ」「オリバーがいなけりゃ、俺はこんな所に来なかったろう」と言ったと語っている。また、ラDRAMとターナーが、息子や兄弟姉妹とともに、どのように身を寄せあってひざまづき、恐ろしい苦しみの祈りを捧げるかということも想像せよ。地獄が彼らの目の前にあり、彼らは罪を悔い改めないことや意図的に罪を犯したことによって彼らの運命が劫火に封じ込められるのではないかと、恐ろしさのあまり震えて気分が悪くなる。

ターナーは、眼前の恐ろしい処罰と、彼が言ったすべてのことの真実性に対する恐ろしい罰則のため、死刑執行人が彼の首にロープを懸けている間に、大声ではっきりと「これはすべてオリバーと政府の仕業だ！」と叫んだ。彼がそれ以上なにを言ったかもしれないかは分からない。というのも、教戒師がそれ以上の発言を妨げたからである。鋭いきらめく剣を持った騎兵たちが、このひどい見世物に立ち会うために集められ、群衆を取り囲んだ。「斧の一撃の音が聞こえると、群衆から恐怖の声がどっと上がった。首が群衆に示された瞬間、ものすごい叫び声が上がった。そして、群衆は突然の逆上の衝動に駆られたかのごとく、クモの子を散らすように逃げた。われに返った人々は唸り喚いた」。⁸⁾ いかなる目的のためであるにせよ、人間の血と苦しみのこのような恐ろしい噴出によって目的を達するような陰謀を是認する人間がわれわれを支配するのに耐えることは国民の不幸である。しかし、その目的が、われわれの権利や自由を永久に踏みにじること——無秩序か圧制かの二者択一をわれわれに迫り、驚いた国民が圧制を受け入れるなら弾圧を加えること——膨大な常備軍を維持し、彼らがすでに返済不能であることを知っている公債を年々増加させること——そして、それを継続する妄想が破綻すると、無防備の貧民に飢餓と退廃を生み続けたのと同じだけの窮乏と混乱を社会のすべての階級の人々に産み出すであろうこと——彼らの気に障る人々を意のままに投獄し中傷すること——こういったことがその陰謀の、目的ではないにしても結果であるなら、われわれはどうして嘆き悲しまずにいられようか？

XI. されば嘆き悲しめ、イギリス国民よ。厳粛な黒服を身に着けよ。弔鐘を鳴らせ。死すべき運命と人生の無常に思いを致すのだ。孤独と神聖な悲しみの中に身を置くのだ。社会全体で悲しみを表明することをためらうな。泣け——嘆け——悲しめ。悲嘆の声とうめき声の響きで、ロンドンを——全国津々浦々を満たせ。美しい王女が死んだ——彼女は最愛の祖国の女王になるはずであったし、その子孫は永遠にそれを支配するはずであった。彼女は祖国に愛情を注ぎ、それを飾る芸術とそれを守る勇気を育んだ。彼女はみんなから好かれていたし、賢明になったことだろう。しかし、彼女は若かった。そして、若い盛りにその命を奪う者がやって来たのである。「自由」が死んだ。死神よ！ 私は汝に、われわれの悲しみの深さと厳粛さをいかなる卑しい悲しみによってもかき乱さないよう命じる。この国を統治するはずであった彼女のような者が、若くて無垢で高貴な「自由」と同じように死んだら、その者を滅ぼした力は「神」であること、また、それは私的な悲しみであるということを知るべきであろう。

8) 【シェリーによる注】この箇所は『イグザミネー』（11月9日、日曜日）からの抜粋である。

しかし、「自由」を殺したのは人間である。そして、心の痛手のために元気が衰えつつある間に、社会全体に蔓延した非難と呪いに対する共感がすべての人間の頭と心に襲いかかってきた。鉄よりも重い重圧がわれわれの上にのしかかっている。というのも、それはわれわれの魂を束縛するからだ。われわれは湿っぽくて狭い囲いよりも悪疫が発生しやすそうな牢の中を動き回っている。というのも、足元にあるのはその床であり、頭上にあるのはその屋根だからである。さあ、ゆっくりと畏敬の念を込めて「イギリスの自由」の亡骸に付き従って墓場へ行こう。そして、栄光に満ちた「幻影」のようなものが現れ、折れた剣と笏と王冠から成る王座を踏みつぶして埃にまみれさせるなら、「自由の精神」が墓からよみがえり、野蛮で許しがたいすべてのものをそこに残してきたのだと言おう。そして、膝まづいて、それをわれわれの「女王」として崇めよう。

【*Complete Works* の解説】「マーロウの隠者」という筆名のもとに書かれた、この二番目のパンフレット⁹⁾は、1817年の終わりごろに起きた二つのできごとの所産である。すなわち、シャーロット王女が11月6日午前2時30分に死亡し、その翌日、「大逆罪」でブランドレス (Brandreth)、ターナー (Turner)、ラドラム (Ludlam) の三人の処刑がダービー (ダービーシャーの州都) で行なわれたのである。シェリーとメアリーは11月9日 (日)、メイブルドン・プレイスにリー・ハントを訪ねた。ゴドウィンや出版業者のオリアーもその場に居合わせたので、当日発行された『イグザミナー』によって詳細に報じられたこの二つのニュースを話題にしたにちがいない。その新聞記事は処刑にともなう恐ろしい儀式の一部始終をいっさい省略することなく記し、その一方で、王妃の死の告知を社説と「王室行事日報」で報じた。その翌日と翌々日、シェリーはふたたびオリアーに会い、メアリーは11月11日、その日誌に「シェリーがパンフレットを書き始めた」と記し、12日には「シェリーはパンフレットを書き上げた」と記録している。彼は11月12日、そのパンフレットを書き上げる前にメイブルドン・プレイスからオリアー宛につぎのように書いた——「先日の夜、私たちが話し合ったことをパンフレットにしたものを同封します。一刻も早く印刷に回してほしいのです。分量は前のパンフレットを上回るとは思いませんが、印刷業者に早速にも取りかかっていただき、私にゲラを送ってください。原稿の残りは日が暮れるまでにお送りします。問題は大胆ながら慎重に扱われていますので私は大丈夫だと思うのですが、

9) 一番目のパンフレットは『選挙法改正案』(*A Proposal for Putting Reform to the Vote throughout the Kingdom*, 1817年)である。

出版にあたって支障があるようでしたら、全体の印刷が終わってタイトルをつける前にただちにお知らせください」。

オリアーが印刷したパンフレットは、現在のところ見つからない。

このテキストの典拠は『われわれは鳥の羽毛を哀れんでいるが、死に瀕した鳥のことを忘れている。「シャーロット王女の死に関する国民への声明」。マーロウの隠者著』（“We Pity the Plumage, but forget the Dying Bird.” An Address to the People on the Death of the Princess Charlotte. By The Hermit of Marlow”）というタイトルのパンフレットである。タイトルページには出版業者の名は無く、その裏には「トマス・ロッド翻刻。グレイト・ニューポート・ストリート2番地」という語句がある。ダウデン博士は、ロッド氏が売りに出した蔵書の目録の中の、当該パンフレットの翻刻版の個所につきのような説明を発見した——「著者シェリーはこのパンフレットを20部しか印刷しなかった。これはそのファクシミリ版である」。オリアーは、『ラオンとシスナ』に関する対処の仕方から判断すると、注意深い人物であった。それで彼は、そのパンフレットを出版してほしいというシェリーの要求を断わったのかもしれない。原稿は最初、たぶん遅くとも1843年までにロッド氏の手に入り、彼がそれを印刷したのであろう。そして、みずからの身を守るために、パンフレットの自分の版が翻刻であるという説明をデッチ上げたものと思われる。

トマス・ペインは、マリー・アントワネットを擁護したバークへの反論として『人間の権利』（*The Rights of Man*）を書いた。その中の「彼は鳥の羽毛を哀れんでいるが、死に瀕した鳥のことを忘れている」（第3版、1791年、p. 26）という一文を以て、シェリーは声明の題辞とした。¹⁰⁾（VI, pp. 354—5.）

参 考 文 献

Ingpen, Roger, and Walter E. Peck, eds. *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*. 10 vols. London: Ernest Benn, 1926—1930 (Julian Edition), rptd. New York: Gordian Press, 1965.

*

Cameron, Kenneth Neill. *Shelley: The Golden Years*. Cambridge: Harvard University, 1974.
White, Newman Ivey. *Shelley*. 2 vols. New York: Alfred A. Knopf, 1940. rptd. New York: Octagon Books, 1972.

*

『岩波 西洋人名辞典』1956年（増補版 1981年）岩波書店。
『小学館 ランダムハウス英和大辞典』〈特装版〉1973年（第2版 1994年）小学館。

10) Thomas Paine (1737—1809), *The Rights of Man* (1791—92).